

kaminorippo.org

付録7a：処女、やもめ、離縁された女：神が受け入れる結びつき

このページは、神が受け入れる結びつきについての連載の一部です。連載は次の順序で進みます。

1. 付録7a：処女、やもめ、離縁された女：神が受け入れる結びつき（現在のページ）。
2. 付録7b：離縁状 — 真実と神話
3. 付録7c：マルコによる福音書10章11–12節と姦淫における偽りの平等
4. 付録7d：質問と回答 — 処女、やもめ、離縁された女

創造における結婚の起源

創造主が最初の人間である男性[זָכָר（zākhār）]の伴侶となる女性[נְקֵבָה（nᵉqēvāh）]を造られた直後に最初の結婚が成立したことは、広く知られています。男性と女性（雄と雌）、これらは創造主ご自身が動物と人間の両方に用いられた言葉です（創世記1章27節）。創世記の記述によれば、神のかたちと似姿に造られたこの男は、地上のほかの生き物の雌の中に、自分に似たものがいないことに気づきました。心を引かれる相手はおらず、彼は伴侶を望みました。原語の表現は[עֵזֶר כְּנֶגְדּוֹ（ʿēzer kᵉnegdô）]で、「ふさわしい助け手」を意味します。主はアダムの必要を認め、彼のために、彼の体を女性の形にした女を造ることを決められました。「男が独りでいるのは良くない。彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」（創世記2章18節）。こうしてエバはアダムの体から造られました。

聖書による最初の結びつき

このようにして、最初の魂の結びつきが成立しました。式も、誓いも、証人も、宴も、登録も、司式者もありませんでした。神はただ女を男に与えられ、男はこう応じました。「ついに、これこそわたしの骨からの骨、わたしの肉からの肉。彼女は『女』と呼ばれる。男から取られたのだから」（創世記2章23節）。そのすぐ後に、アダムがエバと関係を持ち[יָדַע（yāḏaʿ）—知る、性的関係を持つ]、彼女が身ごもったと記されています。妊娠と結びついたこの同じ表現（知る）は、後にカインとその妻の結びつきにも用いられています（創世記4章17節）。聖書に記されている結びつきはすべて、男が処女（またはやもめ）を自分のものとして迎え、彼女と関係を持つというだけのものです。ほとんどの場合、「知る」または「彼女のところへ入る」という表現が用いられ、それによって結びつきが実際に成立したことが確認されます。宗教的なものであれ民事的なものであれ、何らかの式があったと述べる聖書の記事は1つもありません。

神の目には、いつ結びつきが成立するのでしょうか

中心となる問いは、**神はいつ、結婚が成立したと見なされるのか**ということです。考えられる選択肢は3つあります。1つは聖書に基づく真実の選択肢で、残る2つは人間が作り出した偽りの選択肢です。

1. 聖書に基づく選択肢

神は、処女である女がその男と初めて合意のもとで関係を持った瞬間に、男と女が結婚したと見なされます。女がすでに別の男と関係を持っていた場合、前の男が死んでいるときにしか、その結びつきは成立しません。

2. 相対主義に基づく偽りの選択肢

神は、2人が決めたときに結びつきが成立すると見なされます。言い換えれば、男も女も望むだけ多くの相手と性的関係を持つことができますが、たとえば一緒に暮らし始めることになったために、自分たちの関係が真剣なものになったと決めたその日に初めて、神は2人を一体と見なされるということです。この場合、男の魂が女の魂に結び合わされる時を決めるのは、創造主ではなく被造物です。この見解には、聖書的根拠がみじんもありません。

3. 最も一般的な偽りの選択肢

神は、式が行われたときにのみ結びつきが成立したと見なされます。この選択肢は、2番目の選択肢と大きくは違いません。実際のところ、唯一の違いは、その過程に3人目の人間が加わることだけだからです。その人間は、治安判事、登録官、司祭、牧師などです。この選択肢でも、2人は過去に複数の相手と性的関係を持っていてよいことになりますが、指導者の前に立つ今になって初めて、神は2つの魂が結び合わされたと見なされます。

婚宴における式の不在

聖書には4つの婚宴が記されていますが、どの記事にも、その結びつきを正式なものにしたり、祝福したりする式への言及がないことに注目する必要があります。結びつきが神の前で有効になるために、儀式や外的な手続きが必要だという教えはありません（創世記29章21–28節、士師記14章10–20節、エステル記2章18節、ヨハネによる福音書2章1–11節）。結びつきが確認されるのは、処女が最初の男と合意のもとで性的関係を持ったときです（結婚の完成）。2人が宗教指導者や治安判事の前に立ったときにのみ神が2人を結び合わされるという考えは、聖書に根拠がありません。

PDF：聖書に記されたすべての結婚を収録したPDFをダウンロードできます。

姦淫と神の律法

神は初めから姦淫を禁じられました。姦淫とは、女が複数の男と関係を持つことです。これは、**女の魂は、この地上では一度に1人の男にしか結び合わされない**からです。女が生涯のうちに関係を持つ男の人数に上限はありませんが、新しい関係が成り立つのは、その前の関係が死によって終わった場合だけです。そのときに初めて、男の魂は、その魂の出どころである神のもとに帰っているからです（コヘレトの言葉12章7節）。言い換えれば、別の男と結びつくには、女はやもめでなければなりません。この真理は、聖書の中で容易に確認できます。たとえば、ダビデ王がナバルの死を聞いて初めてアビガイルを迎えに人を遣わしたとき（サムエル記上25章39–40節）、ボアズがルツの夫マフロンの死を知っていたためにルツを妻として迎えたとき（ルツ記4章13節）、そしてユダが次男オナンに、亡くなった兄の名によって子孫を残すためにタマルと結婚するよう命じたときです

（創世記38章8節）。マタイによる福音書5章32節、ローマの信徒への手紙7章3節も参照してください。

男と女：姦淫における違い

聖書にはっきりと見られるのは、女に対する姦淫というものはなく、男に対する姦淫だけがあるということです。多くの教会は、男が女と別れて別の処女ややもめと結婚することで、元の妻に対して姦淫することになると教えています。しかし、この考えの根拠は聖書にはなく、社会的慣習にあります。

こちらをお読みください：付録7c：マルコによる福音書10章11–12節と姦淫における偽りの平等。

その証拠は、主のしもべたちが処女ややもめと複数の結婚をしても、神にとがめられなかった多くの例に見いだされます。その中には、4人の妻を持ち、その妻たちからイスラエルの12部族とメシアご自身が出たヤコブの例も含まれます。ヤコブが新しい妻を迎えるたびに姦淫したとは、一度も言われていません。

もう1つのよく知られた例は、ダビデの姦淫です。預言者ナタンは、ダビデがバト・シェバと関係を持ったとき（サムエル記下12章9節）、王のどの妻に対しても姦淫があったとは言わず、ただ彼女の夫ウリヤに対する姦淫だけを指摘しました。ダビデはすでにミカル、アビガイル、アヒノアムと結婚していたことを覚えておいてください（サムエル記上25章42節）。つまり、姦淫は常に男に対するものであり、決して女に対するものではありません。

一部の指導者は、神はあらゆる点で男と女を等しくされると主張したがります。しかし、それは聖書が扱う4000年の間に見られることを反映していません。妻に対して姦淫したとして神が男をとがめられた例は、聖書にはただの1つもありません。

こちらをお読みください：なぜイエスは今日、一夫多妻をお許しにならないのでしょうか。

これは、男が姦淫しないという意味ではありません。**神は男の姦淫と女の姦淫を異なるものとして見なされる**ということです。聖書に定められた刑罰は両者にとって同じでしたが（レビ記20章10節、申命記22章22–24節）、男が童貞であることと結婚との間には関連がありません。姦淫があるかどうかを決めるのは、男ではなく女です。聖書によれば、**男**

は、処女でもやもめでもない女と関係を持つときはいつでも姦淫します。たとえば、25歳の童貞の男が、すでに別の男と関係を持ったことのある23歳の若い女と寝たなら、その男は姦淫したことになります。神によれば、その若い女は別の男の妻だからです（マタイによる福音書5章32節、ローマの信徒への手紙7章3節、民数記5章12節）。

レビラト婚と家系の存続

女が別の男と結びつくことが許されるのは、最初の男が死んだ後だけであるというこの原則は、家族の財産を守るために神が与えられたレビラト婚の律法によっても確認されます。「兄弟たちが一緒に住んでいて、そのうちの1人が子を持たずに死んだ場合、亡くなった者の妻は一族の外の他人と結婚してはならない。夫の兄弟が彼女のところへ入り、彼女を妻として迎え、夫の兄弟としての務めを彼女に果たさなければならない…」（申命記25章5–10節。創世記38章8節、ルツ記1章12–13節、マタイによる福音書22章24節も参照してください）。夫の兄弟にすでに別の妻がいても、この律法は守らなければならなかったことに注意してください。ボアズの場合、彼はルツを自分よりも近い親類に迎えてもらうことさえ申し出ましたが、その男は断りました。もう1人の妻を迎えて、自分の相続財産を分けなければならなくなることを望まなかったからです。「あなたがナオミの手から畑を買うその日、死者の名をその相続地に立てるために、死者の妻であるモアブの女ルツも迎えなければならない」（ルツ記4章5節）。

結婚に関する聖書の視点

聖書に示されている結婚観は明確であり、現代の人間の伝統とは異なります。神は結婚を、男と処女またはやもめとの間の肉体関係によって完成される霊的な結びつきとして定められました。そこには式も、司式者も、外的な儀式も必要ありません。

これは、**聖書が婚礼の一部として式を行うことを禁じているという意味ではありません**。しかし、式は要件でもなければ、神の律法に従って魂の結びつきが成立したことを確認するものでもないことを、明確にしておく必要があります。

結びつきが神の目に有効と見なされるのは、合意のもとで関係を持ったその瞬間だけです。これは、死によってその絆が解かれるまで、女は一度に1人の男だけに結びつかなければならないという神の秩序を反映しています。聖書に記された婚宴に式が見られないことは、焦点が人間の形式ではなく、親密な契約と、家系を存続させるという神の目的にあることを裏づけています。

結論

これらすべての聖書の記事と原則に照らすと、神による結婚の定義は、人間の伝統や法的な形式ではなく、神ご自身の設計に根ざしていることが明らかになります。創造主は初めから基準を定められました。男が、結婚することを許されている女、つまり処女またはやもめと、合意のもとで関係を持つとき、その結婚に神の前で証印が押されます。民事的な式や宗教的な式は、公の宣言として役立つことはあっても、結びつきが神の前で有効かどうかを決めるうえでは、何の重みも持ちません。重要なのは、神の秩序に従うこと、結婚の絆の神聖さを重んじること、そして文化の変化や人間の意見にかかわらず変わることのない神の戒めに忠実であることです。